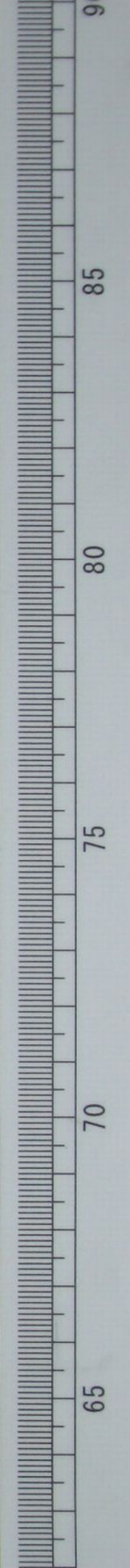


香
草
集
百

百番連寺合
心敬百句
二百五丁番連寺合序
卷何卷
永正十五年正月
基佐句集
宗七

伊地知文庫
文庫20
90



歌書

伊地知氏書冊

百番連歌合

一番

左

宗長

あつま〜か〜き〜き〜き〜き〜き
天地とけりて夢を立ゆらん

右

徒ぬ影のりも年六歳より
玉の塚へ春のみきりしひさしん

前内府御判

三条西殿

左連歌天地并岸の住者より陽春
運舟のそつを遠くさる理り怪るる
うふ風解又長き事一初は巻紙
一番左方き宗長とらんしうり右又

春風の有情な枝を〜の垣ぬの因
わとよひはよ〜心海と光のれと別
ま〜〜〜〜〜と入る
よ天地と〜〜〜〜と思よ
ゆる〜〜〜付や〜と〜〜〜
方ゆる〜左可為結

夢庵老人判 杜母花也号青柏

左の白と比と〜〜と〜と
〜〜と〜〜と〜と〜と
〜〜と〜〜と〜と〜と
〜〜と〜〜と〜と〜と
〜〜と〜〜と〜と〜と
〜〜と〜〜と〜と〜と
〜〜と〜〜と〜と〜と
〜〜と〜〜と〜と〜と
〜〜と〜〜と〜と〜と
〜〜と〜〜と〜と〜と

た〜〜〜〜〜

二番

左

〜山〜石〜

春風の青柳の〜

右

〜山〜

〜

左〜

〜

〜

〜

右〜

〜

句の海増新うよと見えぬ

三番

左

くらよはうり高き道

梅の香や人のとむる神をん

しりく着る左の道の科

喜柳よりけむし人の後をて

け番左に古今集れあそり右を

大武言をさう後もし道よ人の体くふ

と足る侍より人まともは古風と

ちせりよとりそ古今集れうそく自ん

り侍之きとそ双丸を備左右ともよ

古歌の侍ゆまこと申可く侍之

四番

左

申き弓みしり丸日影さけ

若科を譲ふ常今朝時て

右

草花やまも秋とわくらん

そえりる整ひやめむしん好交

左と科と譲ふ常時よつらん

風情より右にむらん好交世道の

まはるるなりことよて用もこすや

侍らん左の句しよらん

まのわくそんく侍れと右前句残

ふあの人たらしひるく社

五番

左

霧のうしろさつ風をぬく
居る浦半は月よ少あ文々

右

詠こゝし霧は波打もたき
春の汐干汁をさぐるの形こ

危なくる浦わの月廿五夜
とる瀟湘の風景もさびしく浮る
心地しく息感あつてさるる春
の汐干汁をさるる浪前の白り
たてたててさるる九骨の
ておとさるるききき
まは汐干の波さるるさるる
まるる傷るまるる危なくる

逸なまやいん前句こゝし
ねきこゝしまは新あま伝るる
さるる解人の引方にまきさるる
とちしな伝るる

六番

左

さるるもわのぬのさるる雲
まは柳のうらさるるさるる

右

さるるさるるおまきや
九重は都のまはれありて
嵐のおまきまはれさるる
まはれさるるさるるさるる
さるるさるるさるる

尺く作り但右に走山極おまへ
しよや^{ヒイ}く花はつらぬしと述傳
こころをば優美やとくわ猪
善極のつらき九まの教亦同よや
七番

左

うにを高く暮のまのま
あてふおふ花はつと傳らん

右

み流の流しく煙まなり
一村の林のつを花はつて
け番とむむ林のふ減よりふ
るちのくや

左の白もくはつとさるしあう

林のまつを減し流しくまはつり
増るくくや

八番

左

あやかおほくは然^{コラヒ}をそせふ
花も流しをせよまの咲ゆて

右

花をなくまむもんらあふり
よしやあ花をまき雲はらるとん
花を流の親をまことりて学ま
の用ん津橋より右に花をうふ
あまうより花をまき雲の挿とくへ
新造の懸向を具を流傳^{カク}るへ
仍右を流とくへ

西向よりふきん海く向の板も庶
幾すしきこころみえ侍りぬる
程也

九番

左

山のうへより体しひそめく
一本よりしられぬく程也

右

之りとりまぬ板ある山
みる人のなしてまふもむし
左春日井道逢成よる事よ約
る成右陽おこまなるたのりまて
の志よ何くする程と花ようこそ
程心は表保きま也

はまじ又とりくたへ感懐ふ侍
侍り

十番

左

おまじよらとく程のうへ
花よりけさるる程の程と保る

右

うちつあふまやまおほふ家
尋る花よ 誰かみより
尾吉あり新高たう先てうふ程也
の助やと海を程保たのん保る
け向より侍りしと保感懐を
初し侍り保りたりまふを侍れ
り

左の句隠逸のニ夫年々々々々々
作り

十一番

左

三三三三三三三三三三三三三三
わをわをわをわをわをわをわをわを

右

・幾つとて山は山竹のこりる庵
世を世を世を世を世を世を世を世を
花も二句少くして所ありと若く
極も香を増して見作り可わ
何のえなりとも花も花も花も
一久見し作りと右に心さうま
心地し作り

十二番

左

うみの流れの言はれもよし
若くして心さうま

右

心さうま心さうま心さうま心さうま
体は拂ふ年に花ありて
若くして心さうま心さうま心さうま
同様に作り不能たし妙哉
左のこくみと右のやと心さうま心
若くして心さうま心さうま心さうま

十三番

左

若くして心さうま心さうま心さうま

庭よ花のよき花のよき花

右

世中一い何るるり何るるりぬ
きのよのよのよの庭のよのよの
岩紙派しひかたのよのよの
くや

庭よ花のよき花のよき花
右曲のの向の理りとあひ入るる
可粉膏とらえ何れや

十四番

左

おとしひるたれいねともの
花のよのよのよのよのよの
右

那もまとなむい入 山

横をよのよのの奥や花のよの
左連を出しとくまの言詞と
しひるるよ及とに何れもく

左白ん海く難なく何れ右又珠
らも何れ何れ何れ何れの威とも
中つ巻

十五番

左

よのよのよのよのよのよの
海うのぬをたやあてし
右

春のよのよのよのよのよの
春のよのよのよのよのよの
春のよのよのよのよのよの

は番又以左為勝

左右の句は拙工として公翰子と
めるとおほ申離婁も丹まるとい
つへくねん

十六番

左

はさうりたるは濠のさう波
涼しくも離蔵おーまを

右

山の村本の名をさるの歌
まうりや世とうたはかきねん
左の糸うりたるは濠波の對
て涼しく蔵おーまを
神多心法師の山分衣もさるん

うりたる也右涼山の村本の歌
名をとも秘りり歌中ーまを
独吟ねんは河さうた花のさふ
およんといへるもさしあーま
歌うりたるは濠波の對
左の糸うりたるは濠波の對
乙女の衣をさるー布引の
濠もうりたるは濠波の對
知もさるーまをさるうね
まをー濠の切まをさるま
おろしやうりたる也

十七番

左

まうりたるはまをさるの歌

郭公悲少の山ほのくにまたえこひく

右

いづれもさうしてはちうふ道
たをひい山端のるほとまきん
左悲少の山は堪倦て月やに
風神言くやえ侍り右の糸の
遠くは難白よ完侍るをとおし
入山端のつ影と安くうまひし
しつるむ上は志わさともんて
不可思議之准てうを持○夏房判たり
りりもして日し縁とや中へき

十八番

左

あまもさうはうふぬ面うひ
子親さうはうふぬとさう夜

右

くらねえ小山宮にさ火うく影
こふ葉ゆく方もなく少夜冬
杜宇鬚鬚之聲一離田耳耀る閑
闔之影猶却心而已
鶴もやうもほあひれと離小清
の聲はほるよんく侍り

十九番

左

小舟さうてて道も侍り
持扇火や夜の言漱よ更あらん

右

山のうけ給ハ秋風と吹

懶あつひあつひ夕暮るみ
左轉側大いふひみねとて
よりい言ふふしやうりて
傳ふや右の夕涼月待てとも
いふる物とてうけとる
まん又言ふし日暮しは
おひやまきくは妖艶と社
むとほつれりや傳り一
火しうるぬよつれと懶よ
新くゆ涼うきうきや彼六
条法あつて明雲山のうけ
又も成る又云斗ななく

二十番

左

互山あり一嵐の松風
下きゆる谷や妙室村道なるん

右

又も都ををさうり
又立よ程なる神の喜持山
左涼谷村陰涼に射く妙室の
新橋と還途と新ん既佳境と
坊より鳴神の喜持山を奥あ
まともけ尋たのるに似うり
双左ら為携
危左お肌一ほとあや

二十一番

左

人の言せを藤乃上風

好や来りて家古くしてらん

右

高より化のこゝろへ

朝のくさし羅のこゝろ住也誰

危来る群の家古くしてらん

京来人の言と風吹くはぬ

軍庭のうへ海は浪をたてて

右のうへは色かこせ住らん

能く少言の事しきものこと

もけ槿の花のあるにやせ

化ゆるんをらひも心と懸て

何れも群の被友右も三ほり

果てしきこと成り何れも

家古くと傳るもおう

ら右向は海くも向は海く

見ゆ

二十二番

左

いづゆる花そのこ家秋叶

萩原うねもさぬ一葉

右

小は秋のこも小風うらふ

古郷のまは言よ人袖ぬきて

左向のうへはやうもゆるよけ

一盛能付く何れも右のまの

は於通言よ穿し何れも勝

先中庵

主の喜にさりと傳ふやうきさう
さるは左の以うさる花を抄と
りしをあらうき妙しく

二十三番

左

初秋よりし夜うを長くれ
萩の喜今好定くはとる中

右

秋の枝と誰うさむん

露も卯しうにぬ半折時

花の舞大折巻もや萩の喜もやう

やう露を秋袖うさむり

と傳ふもなるん地し傳ふ左

酒落とも是くぬも抱うく斗

み成りりりさるわうり成さる

あやたりし小詞讀きひひし重て

やうしを穿し傳ふ抄を傳長

。今好定くうさぬ半折も感ふ

うく望申

二十四番

左

を明れ月よ山風の夢

雄鹿鳴尾よしきけい物もそ

右

あふはさうし折あらき時の高

池のわさる夜より月の本の端し

小麻竹屋よし露も吹し傳れと

院のほるその月い折伝者乃

ん清くしつらやうんく作
イニナシ
まの双右高勝

左のたげ有る左の切なりは
しきこころこれ

二十五番

左

孫をさしまき長き夜のそ

月や砂のうきとせしめせ初るん

右

うら難ねらうしきねの母や

文るやうてふうき月とさしめ

あまの月左の月とさしめるんあり

左の月と暮へるん海し初又

右と指しは

左の月ひきまきもなき中し小

たけこころのうら難ねらうしきねの葉

けきやもとさしめるん夜の松風

そ神のよなるん比し初

二十六番

左

秋のおそひとなくはうりねる

おそくとさしめるん月と指しは

右

秋の夜文る沙草生し宿

そ海しとさしめるん月と指しは

こころぬ月と指しはうら難ねる

いそよよとさしめるん月よりし初

指しはうら難ねるん感懐はくやと完結

はなも右に終る月村深吟はなも増し
さ海もえく作るや

二十七番

左

あさうともつふせえの夜松

月いよのみひうそはえうは

右

行人もなき道のきの花

赤う穀よともなしはしほそ

左おとひくまなくして年一の

種ぬるいとくふんをおくもや

右い人穀在地作見明月と種

東波ら後赤壁之紙の文研餘鼻

幸の道とくうしけ向まうもく

心地く海懐くくひなく作れい

若る務

とあく一ちくわつてひまことそ

中うし

二十八番

左

秋きぬとあはれいぬはゆは

月やゆえのこころぬきん

右

山深く入の歌よせあうや

月長う照るこ所ぬきん

互向の月人起くされとも月お同

しをきくくおとく

左の向ん海けよも作る若る

ちり〜免やとふうねると括て空ゆめ

二十九番

左

す、吹風を燈をこゝろき

今夜誰月の子持後らん

右

飛り渡す色い消り

鳥羽を夜に流る月鏡

左の吉野の言は月とおとし

ら此を仙の〜と右の

おのとあふれ〜と

うな〜風舞き〜

傳りたよ雜女傳者志平

左芳野のふけり月とおとし

やれ傳り〜歌の初五女字の

河〜も成難きも傳り

と〜右〜月明里橋

鳥鶴南飛るとも傳り左の句又

傳り〜と定ま〜

三十番

左

は〜世〜

鳴く〜

右

月まつこの心〜

里川〜

音羽の橋ある〜

左の〜

感慨慨いけるまよはし傳る也

情も来る尸もをれける句せ
見し伝まきと吾人の梢月待る小
路く〜彫雪も一入増る也

三十一番

左

花もしく〜群野のこ〜

朝毎の亭けうり〜

右

夕影も花の枯叶も葉り

燈けま人の亭けわらふる

あまの毛羽も移る務者伝な〜

亭の重窓も移る〜

中〜もあ〜う〜い〜

三十二番

左

さう船の時や群れゆ〜

葛はう〜尾をハ籠を拓る

右

雁も〜乳を〜枯海

あ〜ぬ年も〜時分

左の連歌を跡ま〜

たの句言の上の句は詞神ひし整

ら色〜も〜

情も〜

三十三番

左

水戸の秋の風ろく宿

新迎き松よ送ふ昔も付て

右

こころのしるし 鶉の啼き

任事さし里ハゆふ屋の秋の風

左方さしあふ物うらやまなく負付

うんハ昔のそら恨りのあへられも

右連雲彼津村の野さし秋風も

さしやうささく感懐よほら橋の字を

付傳り

松よそらハ昔も夕人もあられ付る

ちりりあさきと右いりりよたよやいと

さしハ津村の遠道こもさし

三十四番

左

こころのしるし 山風 乃 音

必妙の月よきぬこと巻捨て

右

つねとささる人ハ社あはれ

月ハ移き山風ハ巻と折るて

左右たよ妖艶無双輪 羸已辨

左右越り替り付れと同一能とこゆ

三十五番

左

屋と影よぬまぬ袖の月よ

深波やく浦輪の巻の秋風

右

ささるしるし 沖津三つ波

立回山嵐の本のささる群を

境やく浦如木のちり尻境地
降吳善林相おあし一者首息
有感

有句此善於心し息も孤くは
ふき難く作る

三十六番

左

人衆稀なる古家の庭
神いさな様立山よその事

右

立しりれ林葉も清ふ井の庵
ぬれし時雨よ行人やこま
神の様立んる先まなね道成
—又お流もぬちと時雨—

ぬれし行人の眼もなまめて前
乃向よりけり名作の仁意を
うまふし是も作まはる左様
中へ—

左神世月の心帯しつる名も作り
初の変字も少し—イニセ心よまらむサカ
おと見作る左ぬれし時雨の雨も
さる年とて句の振も—
作るぬれ—

三十七番

左

清水さぬ敷川つりの里
下そよぐ草の裏夜も月か見え

右

休む好夜にあき 波風

五居やいなむはこよやとさき村衛

右のちきよりしたのぞの霜夜の

誠は老をさへしとわくくは覚え侍連

下戦^の差のまね夜を法教侍り上

下ことな多るも好き中よとくま

うも社返もくもつらまほし

く覚侍も張継る夜泊もつら

曉は社侍りの右よハ懸隔のる

るる毎

三十八番

左

心く明れを霜定まきこぞ

夜の鶴鳴や海も夢とちち

右

ほそく妙水の埋火の許

激の心とほろぬ喜の好定ま

活水流の心とありこほろぬ目

程也や

啼や海も凍ぬ喜をまうくし

空を形も折とやもわれの

三十九番

左

ともしねこにさぬ山里

誰となく直あしや侍る

右

こしおこころをなまはけ好き

人のこ意換る若ハ直まらん

あきの雪はかまの山深うへ
左いあううまわいんきやうしやう
のまの判
雪うきうかてと何もおとしやあ
れ何る増ると申へまう

四十番

左

雪のつらうまのま
小笠山の炭ま肌本と折えて

右

佛の名中し涙は流るり
燈のあかりすくなく年暮り
左あし一任は通きん地し何り
右いん洞傳もやうく表はあや
うめ何り

右佛名の法弘行法を修む他
雪の中しまは付梅をま
折のふも終終とる何左折
まはるる肌本一又の奥はま
なうこくや

四十一番

左

まはようきうし
まはうきうし
三まはうきうし
まはうきうし

右

河まはうきうしや誠ん山道
雪のつらうまのま
左輝丸の古風をなまはうき
右家隆の古風をなまはうき

雲より立ちあがりぬく一むらさき
逢坂山月月の川流るる人あはる
程あはる左に折る冷ほとんそ
侍りや

四十二番

左

三のふりしは流るる花の香は
羽衣の世と分るる夢ハ記と

右

ほのくはるる多枝のつね
三く袖もうらもききききき
程とふは流るるうすむ落の
袖ハ夢も一人あはるとて又右を
侍ると

左右の流るる乱出玄限なく
程もさかたはるる侍りあふ又
字指と侍りと夢雲かきと
そのつらと名をあはる夢物も
中屋一袖れとも夢袖も
花房根宿もも津屋めそも
い少平なく侍りも枝の月
うらもき侍り

四十三番

左

ふとはくさほり道もやうん
谷嵐よりさかたはるるこれか記者

右

夢のふりしは流るる花の香は

二深塔村より流麻奴（本）忠信に
け番も大に控まうけれもや
市三まよりひこれと信らうもかき
流汗ぬもと信らう増くうれもや
四十四番

左

西向とてそを様はゆまう
風所より由良の由流と舟を
右

河をともやう乾山を越えん
以てまうい磯の汐テと河津
西向美足（本）の古風面影はるも似たり
かきまうくうねとそを毎
ゆりの河津磯の汐テ（本）まうら道とも

名は呼ばれもやう

四十五番

左

海はうに流すれもそは
魚しそを鮎の又よ巻巻て
右

ゆきまき帯く人ゆらう
邪もや様（本）のやつ道をあふん
様の中まをあふん（本）をう
ゆれ（本）又（本）右（本）為（本）猪（本）
西向（本）又（本）わきまうくゆり
四十六番

左

こはゆらうら河は舟の末
ゆれまういもゆとそを袖る

右

うき名にふらふらひやあはれん
ひらきもせん人の一筋を家あひ
た名の思念たはれはゆきき作念
りゆりむらる猪

ひらきゆきをひらきひらの三張とゆき
まきふしもまきふちゆき同
程とやハ

四十七番

左

おれうきふきふき
はうきやふきふきふき

右

あつてうきふきふきふき

人のこころくちや一客の因
左の重井の人の思ひきとひ右の
楊家の思念のうきとふきゆき
ふきふきふきふきとふきふき
左右の思重井の思と口とふき
ゆきゆきの思ふきとふきゆき
とゆきゆきの思ふきとふきゆき
うきふきふきふきふき

四十八番

左

人のこころくちや一客の因
つきふきふきふきふき

右

ふきふきふきふき

法まはくして誰しも果はひくま
摺とも同く一歳跡をまなむ侍れ
ハ猪とて人——
とりへのいさか^か——侍り誰小
も果を侍り格とも同く——と
いさかやまてや侍り也

四十九番

左

いさかやまてや侍り也
侍り——を果く一云は侍り也

右

夏衣月まつ青少の袖で
ほくろを袖へ入るるを
常と袖へ入るる侍り也

風情ありと侍り

侍りの影をく人頼のまはひく
跡くく名侍り也

五十番

左

さしを果くく世に何うきん
あはくぬんを侍り也

右

甲はぬ夜半や侍り也
いさかやまてや侍り也
あはくぬんを侍り也
いさかやまてや侍り也
侍りの影をく人頼のまはひく
跡くく名侍り也

五十一番

左

おりのりうそまはむゆき
恨しあふえいひつゝたふは

右

さばこつらふさつりも遠し
まぬやひぢりぬきひしりん
左友の待意まぬ人とみれる名はし
あふるうそまはむゆきの
あふるえいひつゝたふは
物の由^{イニヤ}えいひつゝたふは
まぐしをまはむゆき
あふりて左を勝れり
左右のこつらふさつりも遠し

五十二番

左

おりのりうそまはむゆき
意に管ふるしと愛まなくうそま

右

を込めと絶と誰入るもん
二道はりや夜もあひるくそま
悪の道はりや夜もあひるくそま
とあひれんらん二道の物怨し
りりしんかこやと又左を勝
悪えなくさまぬぢくのんは
向の程もおおしきこや

五十三番

左

たのむ中に多きまはる
偽とみるくはくは又をみる

右

うはくもる人のまの葉
一筆とらこちなくさるおやうて

あ通の影書一筆かこちなくさる
あ通の文の中まをくまるとは
りりしうらな魔の偽に誇りて
あ通の文の中まをくまるとは
りりしうらな魔の偽に誇りて

五十四番

左

あ通の文の中まをくまるとは
りりしうらな魔の偽に誇りて

右

あ通の文の中まをくまるとは
りりしうらな魔の偽に誇りて

五十五番

左

あ通の文の中まをくまるとは
りりしうらな魔の偽に誇りて

右

あ通の文の中まをくまるとは
りりしうらな魔の偽に誇りて

連三層より今二層の兼云ふ成り世近
のこらひさるる身一右又揚人社
勢なりれと心へる恋慕のよもまて
世より愛及誠親と終る煩悩則
菩提の心心ももつなひしく持こく
侍れいさくく務員と定むる
左の句はつりぬりくかの
侍るま又移り社と侍るよと何と
此ももいんせか

五十六番

左

こころは捨ぬ身はひの心
まをましまもまのこまの心
右

ほのこらりつる夢の心さ
多指のうほる身をなこり
右の向より心ひつりて侍勝も見え
侍れい吾友右侍ととく
云はるふまその恨跡をけ句
侍り夢る身を余波も飽なる心
い少年ちうくい又侍る心心

五十七番

左

らくちうひさき育く村床
せをそ愛慕よつりて心もま
右
夢むらさきつり侍る心
やうま心心と何事も侍る心

左いゝふぬまを待たはほのゝなる
俵をうこそるもつとと油切の心と
くゝとと務（頁イ）省を明あゝゝゝ物と
左の句（新イ）程工（イ）中（イ）と石ゆしきつゝるを
中つ居（イ）

五十八番

左

おとらけなまゝ人いふたれ共
似つるもやとをるゝ形と共（イ）

右

あはれい白あゝ人の（イ）
あはれい井あゝつゝゝゝや
あゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

是も左の句のう海程やゝゝゝゝ

五十九番

左

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

右

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
判詞を後ぞり（イ）程考
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
傳りゆや

左もあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
号ハ程強ゆゝゝゝゝゝゝゝゝ

六十番

左

控さうてしよあたる道なき
まやま〜妹のうらみ苦みん

右

仙のうきう海そんて悔
君なる家面影や九十九髪
右のつくも髪りりし妹のうらみ
夕暮の情なきいんら〜ゆきや
左右草この物元の情をん地
て吟味不き得判

六十一番

左

何うたといよなりてうゆき
あまもよゆきふま〜教人
右

あまもよゆきふま〜教人

あまもよゆきふま〜教人
おもしろいまは是ゆる山の奥
左忠岑の長歌の心を〜
の静謐を以希之山の奥の妙法に及
こは花の都をわらて可る指
朝霞ゆるおしり山居を〜
あまもよゆきふま〜教人

六十二番

左

何より〜てうねひ初らん
あまもよゆきふま〜教人
右
あまもよゆきふま〜教人
あまもよゆきふま〜教人

左何よりうらとふへり前句より花
あつぬ木のことと信ふい初るるん
と何れも免る付地定よ世俗の身ふ
あま何れもよし評の身より花
深く狂う始へるいあや

右吉野の身とて入思入るるあつ
すの地れとも花あつぬ木のこと
任前句も切るるよ花持

六十三番

左

岩の鴨なく夕暮

真深の巖に書あつよりの川

右

山さしあつふあつりの里

香なる巖に書あつ佐保の内
吉野河鴨鳴又のう海さして芳え
傳れと佐保の内山さしおほい河
顔も減るる花は傳り後と
去程三笠のれともわきこく持
つき神ひやあつ鴨なく夕暮河や
う小見傳り

六十四番

左

河風よりあつて流る橋の上
足通る子遊の字流の葉舟

右

流る河もあつ川も
世と字流の里もあつ守り

左右の字活の葉、舟さる料、
と、之とも、弄、撰、古、跡、ハ、珍、ん、と、ま、り
傳、る、ゆ、や

あ、向、の、字、活、左、ハ、さ、る、や、り、右、を
お、と、ふ、所、り、り、日、一、程、さ、る、し

六十五番

左

曉、海、く、た、ほ、さ、る、さ、り

里、到、さ、る、ゆ、あ、づ、く、り、も、遠、

右

家、門、さ、る、人、の、面、影

誰、と、し、も、さ、る、と、善、れ、ハ、大、快、

鶴、丸、雜、品、異、心、調、為、等、同、者、平

鶴、丸、の、發、た、る、ま、り、と、さ、る、と、さ、る、又、さ、る、別

六十六番

左

舟、ま、り、さ、る、月、明、原

夜、さ、る、さ、る、山、を、さ、る、雲

右

正、く、さ、る、船、の、波、の、伸、波

岩、よ、む、さ、る、さ、る、さ、る、さ、る

表、さ、る、材、持、味、さ、る、振、同、一、風

情、さ、る、山、本、の、山、氣、培、れ

山、さ、る、會、え、與、同、着、さ、る、伴、た、さ、る

さ、る、さ、る、さ、る、さ、る、さ、る、さ、る

さ、る、さ、る

六十七番

左

たしるしに代りて
香ありて境屋の煙うらやみ

右

里をかりしある
誰れか高柴を
左境屋の煙い
けいひより
境屋の系は
とや

六十八番

左

夕誰の竹のうら
山雲の言は
右

は
雲を山
吾心
と鏡
何事
と波

山家約
うらや
六十九番

左

うらの世と
舟を
右
うらや

竹あえりる庵の窓のより一犬
柴あきる庵井編於庵同一
の事一也

両向の井庵各有感う等同平

七十番

左

深いまゝ深き池もはくさし
浅うぬふあるとらわきに

右

何者うへおし限り社あつ
人毎まうぬ深きこゝ深き

左へあるとら物深き社と押をう
ら色われと右、樂府天イ玄可庵の洞
海底臭字天上鳥字高可射字

深可釣字唯有人心相對咫尺
間不能料ナとくも思ふまゝに
津指物イのわれい指とくも先中め
右向を絶妙也象踏垣河月照
淵深末及深明字左謂尋常
理也

七十一番

左

いれ名を何と以してわれん
んま深くはうもくも強くあふ

右

浅くともり方と名を
深うりかふ人のそ後
左右まうを戒先顧る

しりりきくも神妙な流れと
まき方おもしろく

左右向の程勝者おもしろく

七十二番

左

まじりむきまやうき
新大とうきまき

右

年と経てもむいふ文の弁
あまの弁光輝とあまひて
若^新別あまひて
両^新きく申永曉種人尚有感

七十三番

左

松風きけい物まき
琴の喜やわねんも流ぬらん

右

吹捲風月の末々
遠くうも笛おのよ
左の琴の喜減ふわねんも
う流れと右の笛の秋のよ
流^新りて肝^新は流^新り作り
琴韻笛声如聴頤^新聲可為同曲

七十四番

左

まじりぬ神多福
ありはこふ

右

新〜〜〜
左の形跡〜
傳れと右の〜
乃ひ〜

本末向し與つと〜又〜
と祈誓せし跡する事〜
の形誓言終し〜

七十五番

左

海〜〜
い〜
右
海〜

才の根目〜
左葵上の母文の歌〜
い〜
お〜
作〜
左心〜

七十六番

左

い〜
仙と心む〜
右

い〜
事〜

右の句もよみ何れもさうと云へるは
傳角の傳りり勝と云

衆の後身不可説の境迄め氏向の中
も能くさうさう糸絶妙さ

七十七番

左

人よと傳いりくさしと云す
その年むるしそとに^{オノノ}知世で

右

何れも何れを祈るなりらん
そのことを終るも^{オノノ}そ
むなしく^{オノノ}そ^{オノノ}後漢揚
農の田知の思れ是誰人もさうさ
道あり何れを祈ると云す

右の句もよみ何れもさうと云へるは
傳角の傳りり勝と云
衆の後身不可説の境迄め氏向の中
も能くさうさう糸絶妙さ

七十八番

左

何れも何れを祈るなりらん
そのことを終るもそ

右

何れも何れを祈るなりらん
そのことを終るもそ
むなしくそ後漢揚
農の田知の思れ是誰人もさうさ
道あり何れを祈ると云す

七十九番

左

つら世中一様やう暇んん
うらももさあは推る物向後

右

体しい倦ぬ家表しき
好まのあつ侍てし推ん世
左の既業門の世推人とうりて後業
と侍推しを推しと推しと推し右の表
年心くちうちうち世と推ん心
未しこのまの心を本侍うりたま表
あも心もちいも推りなまうて持と
ま
心侍と中よ右の推由やうし心と

れよと伝や

八十番

左

うらもお人の品愛なり
世の中よ心よたの推しん

右

倦ぬるを物のおひともせよ
誰もらうき世と心よ恨むらん
左の先人と恨つる心を入る心めを
叶ひて浮世の恨目一年なうらも
増れうと心侍を推しん

世の恨よりくめし向の推きこらひ
心くうと愛むし心侍く心よ心と

八十一番

侍

左

おとへい いふ 果てしなく

いふは いふ 世と名つひに いふ せん

右

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

八十二番

左

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

七十の世のいふと何なるん

右

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

八十三番

左

おとへい いふ 世と名つひに いふ せん

終の世と云くは海はしきも増ふ

右

おのふあまのりよかこちとまはる
心うそくおちき世の危あしき
左若とも小以神妙風能不能
言述親而已

つれもつれもよよの心切え左の若前の
句よ心を附する若杯くくや

八十四番

左

左の山終も何くう終る終

春もうき古の人や老ぬ

右

若ぬ世と老のうらぬ神の道

老やこれより多らひあまらん

左新歩も遠く終古の人老のうら

心を深くもきるんを終るとん

左右の危の義深くも終るとん

古郷人や終感深きまをと見作り又

左よりり終る也

八十五番

左

山雲低ふ文つらうもくも

後の世の危あしきとあまらん

右

えつらうも終る隠家も心

後の世の終るまを心とらん

あまの後の世危く終るの心

つり右い悔意の舞^三ゆ左なと六指
侍^三う^三らん

専修の志ありまほき^三に^三き^三と^三
是しなを^三と^三ら^三も^三中^三侍^三入^三られ

八十六番

左

老^三遊^三し^三き^三淨^三を^三社^三き^三市^三
之^三道^三ぬ^三ま^三な^三ら^三は^三は^三ね^三む^三く^三や^三ぬ^三小

右

い^三の^三舞^三らん^三人^三の^三世^三の中^三—
心^三を^三と^三ふ^三ま^三れ^三た^三の^三鐘^三も^三到^三て
左い各々の理とま^三れて^三流^三石^三も^三ね^三む
と^三ひ^三ひ^三右^三に^三つ^三ま^三る^三ふ^三た^三の^三ま^三ね^三と^三なる
同^三—^三程^三も^三う^三う^三右^三に^三今^三少^三—^三と^三流^三

か^三—^三こ^三き^三こ^三ち^三よ^三う^三ら^三な^三う^三う^三して^三ま^三れ^三と^三勝^三と^三流^三
二二

こ^三—^三ま^三の^三小^三ね^三む^三ら^三た^三ま^三ね^三は^三ま^三と^三希^三は^三し
三三

八十七番

左

い^三い^三—^三斗^三よ^三日^三敷^三成^三も^三好^三る
を^三ら^三ま^三—^三た^三あ^三も^三や^三ら^三い^三ま^三ね^三る

右

何^三を^三う^三あ^三ふ^三跡^三と^三る^三は^三な^三き^三
家^三の^三也^三や^三ら^三い^三ま^三ら^三う^三ら^三ね^三る^三らん
左い世の理り月日陽りま^三ま^三や^三ゆ^三の^三ハ
意^三慕^三も^三ま^三着^三中^三し^三ひ^三も^三ま^三索^三く^三に
志^三れ^三等^三生^三む^三り^三習^三ひ^三結^三ひ^三ひ^三う^三な^三か^三
此^三侍^三り^三右^三に^三ま^三ま^三ら^三ら^三ゆ^三も^三あ^三を^三
お^三—^三ね^三ら^三う^三ま^三—^三ま^三い^三心^三自^三所^三の^三早

謙よしわうてふまは侍れと程有
増ふへきや

左の句さしと平くとまは見え侍り
右又清浦朝臣のまねまにいと
詠し侍りしとまは見え侍り
侍り又持たや中侍らん

八十八番

左

さちをもうかほいとまを恨まぬ
侍りと見えこと侍らやうり

右

侍りもさちぬ社に治められ
まは見えよほまき深し袖
危あつく侍家のまは袖ありと侍ら

句法そまをよふ句の扱も右よりま
まは見えよほ見え侍りや

左の句切よまは見え侍りや
さしと見え侍りよほ見え侍り
八十九番

左

つらと見え侍り神のまは人
春日野まき侍りまは見え侍り

右

袖よと見え侍り月の面影
石法より松の風とまは見え侍り
左のまき野まきのまきと見え侍り
右のまき野まきのまきと見え侍り
残すまは見え侍りまは見え侍り

定る

兩社天神之領不堪嗟歎也君長合
躰親民謳歌之時至故可謁仰
者乎

九十番

左

以川に越て山を過るる
うけりやいふもいふもいふもいふも

右

三つうらひぬる藤のむつ
家も水も南もさうめん
左は浪もさうめん代と祝し右は南
北法家の能書家と書しなり
合辨もさうめんたすむし
不付勝負

不付勝負

け番又上下長久し祝詞也尚以

新字左右而已

九十一番

左

不二根の夫の魚もさうめん
左

鼠の雪もさうめん

左慈齋和尚の天の系名二のうら
まはしは藤くぬふのさうめん
てはいつとくは雄雄伝はうし
後系は授政久方のさうめん
保胎山まはさうめん
まはしは藤くぬふのさうめん

傳北の是ハ日影も中倉さう但連
歌の用ハ^{捨イ}振替も先傳く跡を^{トカメ}処口
中よりあつた活字のお丸不審と
たて傳るをうりて心傳もも不三乃
振のまゝの互なふとのなりも一
この意もる不死の振影ひちく出
形乃白くも一^{葉イ}葉の替風系。
んさうくもまおもも一併部山
あもちちら老をくも此振も笑もあう
士筆もふたふ倉りくもあや

九十二番

左

梅は白し柳ももて風力伝

右

涉みより^{葉イ}葉もも柳うり
左ハ今上御製以ま竹の定もあ
し^{葉イ}し^{葉イ}く^{葉イ}三^{葉イ}の^{葉イ}水^{葉イ}會^{葉イ}小^{葉イ}梅^{葉イ}も^{葉イ}香^{葉イ}小^{葉イ}
柳とこれハ風力^{葉イ}も^{葉イ}も^{葉イ}新^{葉イ}撰
菟玖波小撰^{葉イ}も^{葉イ}れ^{葉イ}傳^{葉イ}り^{葉イ}や^{葉イ}ん
あし^{葉イ}あ^{葉イ}い^{葉イ}似^{葉イ}る^{葉イ}も^{葉イ}ら^{葉イ}し^{葉イ}傳^{葉イ}り^{葉イ}石^{葉イ}の
葉^{葉イ}も^{葉イ}も^{葉イ}柳^{葉イ}も^{葉イ}も^{葉イ}傳^{葉イ}る^{葉イ}も^{葉イ}傳^{葉イ}れ^{葉イ}を
を^{葉イ}為^{葉イ}勝^{葉イ}

左右各艶而妙也柳色催鶯之節
以古語爲新^{葉イ}作^{葉イ}然者左亦不可^{葉イ}者^{葉イ}乎
九十三番

左

朝霞く老を^{葉イ}記^{葉イ}る^{葉イ}も^{葉イ}里^{葉イ}力^{葉イ}伝

右

おしむつ月日しむつ
は番右の花の葉は枝更名ありて
猪とほ

あ向まらんころもゆへ同く程程イハレ也

九十四番

左

さきうはつふぬる夜郎 三

右

あ鶯あく夜は宵ける月相
左時多ははるよつねさくら地し傳る
右の水鶯宵の弓は胡戸持よあつる
しやさしとて又猪の家と加へ傳り
つらぬるよとぬい夜は宵けると傳る
ふ月相子てやも思也又分別をいし

九十五番

左

さ夏小雲やうる影さる種

右

夏は多し山の上あぬ水はなし
右の山の井波とも猪ふともいそてま
ふ鶯れる空は雲の仕業よ傳る
左のさるまらるる傳れり
右の句跡しきこるまらるる初初の五
み字も今少しあそまほしきとて
傳る左は五年小くも物さきも也

九十六番

左

風や終うる海りきさ目さる

右

萩よのそ吹く風う萩乃亭
右の萩の風も吹く——く作色と
左の首をも空より——長
言き風辨よもぬ白く作色——
左の白く秀色とも中へき之神多し
西室の山家せう衣の裾も多くの
ん就く——右も秀風のう海こま
やうにんきさ解くくけしを明
うう左の松こい神ふん作り

九十七番

左

月の松林初風清——萩の亭

右

月や萩をたらの布れそとほし
九月の松の初風は清き身も——みく
感懐深——作色清

月下の萩乃亭涼——くそとあふ
つき取わかちく——右も深懐深谷の中
ううあつ金くさゆを辨別ううとみく
とも月色お對中へき

九十八番

左

秋や萩のそわらぬ松乃以迄
右

初三く色深くほそる山をう
左のそともわらぬ松乃——みく葉の松も今
一入るるんむう松と色とも深き平る

山つくりそみの秀色も伝ふや
以つともふね海へほそちも小古き
詞ゆく各人の辞成へ〜又同等

九十九番

左

以津く本本すも好き山外

右

回鶴も任己く注ぬ〜右欄の松

左海山の道は〜るまふ〜まの葉

右こは社とわ〜ら〜小

右盤木の陰は〜つ〜本のこと

右は〜海は〜と境も〜業〜

右は〜色は〜れと不可思議も伝

右の欄へ松屋を欄の〜まひ〜て

松の子をを繋ぐ任〜ん仙鶴の心

凡俗も〜と〜も〜左の本

右海は〜と〜と〜持

右海山のう海は〜〜り右文下

右海〜〜と〜と〜持

〜〜〜

百番

左

みまの宮あけハ〜〜山海

右

さうと春待ると〜〜松の花

左水面無浪林頭者花の

右と廊の神詠は句の親見聴あ有臘月

乃梅花の春色と詩と〜〜言と時

南意別妙のこころに海をわたりて
くたを携と定の中へまゝ

右の句しんありてまを伝わりけり
たのまを叶ふはとてまをまゝ
しんありてまを伝わりけり
伝わりけりまをまゝ

ちもいさるしきまをまゝ
しんありてまを伝わりけり

楓蔭散木逃康一虚子

此一卷おし一年の事もや為意の事
追々雌雄を記しきよし中へまゝ
けりしと更まはしりてまをまゝ
まひるしと折を伝わりしと自深
返しん傳れを感懐思ひしと

おて老拙の形名は何年とらとたぬい
まはしんありてまをまゝ
折長公のまをひしとまをまゝ
まひるしと折を伝わりしと自深
返しん傳れを感懐思ひしと

干時

永正五年六月日

夢庵老人記之

右一冊、宗岳、嶺、吟、首、及、連、歌、合、也
判、者、銅、西、三、條、道、遠、院、白、雲、僧、杜、母、見
其、子、房、以、我、山、自、相、也、著、者、訖、覽
隆、康、御、正、筆、以、信、書、寫、之、年、

深川文楷政武

寛政六年六月廿七日控帳子所記
本之飛回年二月中旬以以柳原一任
頃定以本合書字也、不、真、書、之
本、以、一、校、合、年、

右一冊、章甫、海、山、の、記、也、
寛政七年、月、日、白、雲、仙、山

連歌百句

春

心敬僧都

雪に名一山を新ゆる今年春

三のふよりき松のあつりせ

浪をちり海をまよやうねん

と傍つとみそれをねむ

梅のちる垣ねりちう津をそそ

うすたる月小梅よりふく後

雪のふゆぬ夜の夢もう那

むうしは庭よ白ふむとら

休下 庭むよ月のことと人か

とらねらうう中の下ひと

詩人ふん法よふとりのうし

阿月も春をねあつきの水

花白ふ志の海邊小娘ゆして

味三入

復ちたにさしやちみふ十の卒

山崎の後のやまののまをさるる

山崎の後のやまののまをさるる

むらつの岸にうはむうけはし

途をさるるうをさるるひしき

新妻の後の多解山を礼落る

味三入

に世のなかりよきまのつあも

ちのむを老をぬもちきとの成

はもれ杜のそけ落るころら

山雲のうらひをのちかへて

吾もあつと風をさるとはる

まをさるる命は何よけりん

老のま清野まをさるるや

味三入

うらひのしきし春うらるる

とわやう桐をさるるし

又もらん中とさるるゆうの

家とわをさるるまはるるし

巻十一句
付句十有

夏

山崎もむけあつるう月

ゆけし里つふすま下道

時多たう人傳もさるる日

三の界いささうらふも

二まときふいささうら

なる月よさるるし

足もみ河あひよのつる羽衣
いつもそゆのかさ残りん
うひもさかひつる高蒲花の末
とるあつもなうさよ礼多
下りえのさあお朝もふ 軒
とらぬ教をえもる水菜
五月雨のつるけさの末まこ
つる峠よ河をまほとく
夏衣うほおの山崎織とひく
のしらよまをまうつり
夕立のきりす月の子影川
水もきこつてこいあつと波
夏あうつてさあ秋のそらん
掛してさあ池のうにまおら
足もみ河あひよのつる羽衣

飛句二句
付句十句

秋

見ぬのま川深いつる時雨哉
喜かき風松陰の松陰
瀧定き三山の月よきあうて
おらさしき津の水音
舟下りるし月月の文よた
たうれとの塔やうに名と成ぬ
秋の味
おらさしき津の水音
舟下りるし月月の文よた
たうれとの塔やうに名と成ぬ
いねさの夜をた誰億ゆん

林三入

ま歸子風あく月乃山里
なうそあともき又の一
神也老のこもあむらん
庭もも寝く昔ね世あ
関の本を流の秋のし川風
川月也流もを立空に
神の木もきこむる海の外
あけてそつき獲筵の月
人の影も昔の風をけあよの風
古まの形の松皮も板屋
まのふよお川の神の申あま
天つうり徳のふよあ明のし
石文ねあしは袖もね

月こま〜礼家よ本毎あ
こしき袖江の水流こして
ほうき月の舟あつは
いしく小伝も〜天か下
空流所ぬりぬるは美園荒
あま果ね野も成里やうらん
降例のま流り秋のあうら
冬

冬

松風やい〜る神の月
わらねやまをさやの申道
栞板もあまぬうけ初時雨
こ〜い〜く〜ぬ〜る〜

あつらてや月一は見えし時あるん
越るお山ゆふまはしり
洗のる月のるのるも
細代ち入はや遠く
たかみる月流き
うけしる水の音きこ
古寺は庭は松竹の月る
んるるるの松竹
松竹をさへ
うきとくは
うきとくは
朝戸あふむいのはら宮と
こく月

河東風抄を
月あはる袖のうき
あき
月宮
秋夕句

意

重に
ゆき
わさ
三の
ま
う
る

月味ニ入のちや西味ニ入よなる人のまゝ
のうらあひひりまゝの人
令味ニ入あまの文下味ニ入たとくさるる
月味ニ入のちや西味ニ入よなる人のまゝ
のうらあひひりまゝの人
令味ニ入あまの文下味ニ入たとくさるる
月味ニ入のちや西味ニ入よなる人のまゝ
のうらあひひりまゝの人
令味ニ入あまの文下味ニ入たとくさるる

は味ニ入のちや西味ニ入よなる人のまゝ
のうらあひひりまゝの人
令味ニ入あまの文下味ニ入たとくさるる
月味ニ入のちや西味ニ入よなる人のまゝ
のうらあひひりまゝの人
令味ニ入あまの文下味ニ入たとくさるる

雑

山味ニ入のちや西味ニ入よなる人のまゝ
のうらあひひりまゝの人
令味ニ入あまの文下味ニ入たとくさるる
月味ニ入のちや西味ニ入よなる人のまゝ
のうらあひひりまゝの人
令味ニ入あまの文下味ニ入たとくさるる

野中けつるをいづくも
さほ大なるもくもくさくも
稀ききき信ちりり安別て
うさよめあ人のいささし
さしうる庵は送るとし月
様中さくくくくくくくくくくく
おあーいーいーいーいーいーいー
潤ふと旅人の着をさくくく
よやくくくくくくくくくく
旅人のあつる旅かき河くくく
又袖まされハ本もくわ
くくくくくくくくくくくく
水の月くくくくくくくくく
夜舟のくくくくくくくく

惜はる法乃障と成おん
水小風きく津のうきくく
逢人もさき音け下居
里をさくく山小濠のきくく
衣さけさくくくくくくく
袖くくくくくくくくくく
顔ささくくくくくくく
すあきくくくくくくくく
ういしすくくくくくくく
山中端小くくくくくくく
とらぬ人くくくくくく
老まきくくくくくくく
あきくくくくくくく
くくくくくくくくく

うみあやふ今と違ぬ
持る身あみれ何うとむ
あくはらの色をしる
嬰児もほめをたふらん
夕まきゆる野汐のひま
朝もあなしうとむ
おとしうねるるあらんぬ
吾人あやうあそらむらん
本業はなをうつる果は
何ほふ又このあそららん
桑の香をうそのあそら
ひとり魚つるはらうらり
急いぬあひのうらるる
涯筆持あそらむとあそらん

刻
なまはらうらり
山科のうら
あそらるる夜
山
山
血の潤持あそらむとあそらん

う塔もあはねぬ山のあまひこ
物作三ノふたなりはるをわらへる

六の春さうりしうりいふきり

彼偉北の列もさそもせり

いふふいひやいふはこじん

あといふらと実の直法を

うららある廿月影を

ちりし白く黒く江の松

山山社社のまじりていふる三日月の影

若狭文を在相違

寝まてもうたかたのまじり
八声万く交つ鳥井に月を捨て

徳治四年三月十日 浅倉屋まじりよと見せし
初二夜

二百五十五番連歌合序

藤原兼良

むききたる乃歌の戦場とみり

むらさきけつらうしに宿の兵大ふ

う里しんらわし唐ふふふゆ

神も虎の口どのれむとむりし

わさけいしをいふとつと神も鯨

のあふふうらん年とわさき

からしと柳乃花乃名をたふ

坊とうれをたとうくくむき

ゆらぬる里小むらとらうりぬあ

ゆらとらぬるれいふ里は海を

帰るる如くはて強敵のやう

とうらうて六三とせの春秋と道

了ら長衣のむ香檯のまゝ小笠と
りもくく膽をこくし玉明月
野守の鐘小控と側多々々
常と親もるわふあは年一も
ふらしくわっし書し竹や籠
小笠のあま戸をさく音の
竹は水鶴の鳴き声よしも
あはれは啄木つしはくま
思ひ竹うらむさふあくし
神風や伴路の伎の有りし
くもふらありくも一書のかま
章小兩帖の竹紙とそく入り
ふり是と式もあはれは五言
の書物とほうひく二百解判

乃詞とあはれむはくまき
はくまに漂泊のまき
て一の書をしつれ寸意味
の字へは七句の老老をそく入
まはく一夏一年の竹や
海くまはくまにありし
あはれし耳もくまは地ゆ
むらし竹はまし物合にと
まはく一難波江はくし
飜磨の布うらむしと論
年小身布ふあひあし
心の中ふ竹れとら餘習
むりまうは竹をすり
ふりまうは竹をすり

かゝるまゝにさうあるはさうふ
その志をのこすものありき
あきつらなることせめて家
む月のさう六日七旬十一と
うゝぬおきさうは禁よちん
ありけるゆゑに傳のち傳と侍
あつた浦島に若小とさうを
ちりおとす

倭哲人の名もさうさうふ

さうに言のまふさうも集まる

右之條祥周の由作之波云

文辭にお違あるさう可珍

皇とのこ

勝仙

勅にさうさう發句と奉記

藤原實隆

さうは月の帝の御友と先皇

後代津連歌あるさうさう發句

そさ月相法師中へ美よさう當

代のちをさうさうし小發句小

とさうさうさうさうさうさう

秋のちさうさう風情とさうさ

つらさうさうさうさうさう

つらさうの山遠き月と空とさ

月影さうさうさうさうさ

とさうさうさうさうさうさ

さうさうさうさうさうさ

さうさうさうさうさうさ

くもあやうく天曆以修の歌か
しりても海さし〜杖平山雲の
風解のわ〜経いぢれあやあらん
とせりり〜凡人の名うあ〜何〜
これ凡意のふ録よ〜あ〜さ
歌へ〜たわり〜青雲は忘辰
の夢よ〜い〜し〜唐よ〜傳野の
忠賢の舟楫輔佐の名を残し
巫山の神女の雲雨妖艶の情と
あれるまを〜も〜ら〜を〜ん
今代を法師の〜歌詞を〜え
い〜ぬ〜と〜殿意を〜お〜ら〜し
〜む〜い〜古〜今〜道〜絶〜た〜る〜年〜ふ
〜も〜多〜う〜ら〜夢〜を〜居〜と〜よ〜し〜ま〜り

〜し〜う〜歌〜〜ま〜の〜識〜の〜文〜や〜と
ま〜あ〜や〜〜久〜見〜傳〜〜う〜は
折帯〜使小文清の〜つ
わ〜に〜記〜〜と〜う〜し〜思〜ふ〜ふ
と〜あ〜る〜感〜懐〜ま〜る〜舞〜足
乃端と〜つと〜知〜れ〜と〜く〜九月
十日の程小寄り〜の〜り〜ま〜る
れ〜と〜誠〜ま〜や〜〜ま〜心〜さ〜し
あ〜と〜同〜ふ〜十〜三〜日〜ら〜ら〜の〜音〜し〜き
心〜り〜晴〜る〜夜〜半〜の〜月〜の〜名〜と〜は
もうし有〜き〜お〜あ〜れ〜な〜ま〜ら〜歌〜あ
まはさ〜ら〜〜發句を〜下友〜中
〜き〜よ〜〜作〜〜道〜〜の〜年
と〜あ〜ひ〜知〜〜と〜〜の〜私〜お〜ゆ〜つ

朝之美よしやんかみのり

法師の登壇あり

雲子雲々さん世に代々月

照と別所割衣よ

庭よりあつぬ玉しききのおろ
うきこれあつて侍りひくあ一彦
暮るる銀小押茶のむんり
おとろあつていしむる山の
さきさ押主人の庭の指もひん
小んさつて月さつては松
の戸にもえむる龍あり一彦
あつてはあつてあつてあつと
あつたあつてあつてあつと
わつとあつてあつてあつと
上林下着

のまらけらのを人いさうや
平侍りしあつてあつと
あつてあつてあつてあつと
て天奴もも同く賜を
一者のあつてあつてあつと
院は山のふりもあつてあつと
苔の夜まつあつてあつと
あつてあつてあつてあつと
けあつてあつてあつてあつと
ひくあつてあつてあつてあつと
の月とあつてあつてあつと
はつてあつてあつてあつと
ぬれい宮漏やあつてあつと
あつてあつてあつてあつと

貴公樂年一すことふおあえは
とらふへ式よとら

吾一卷ハ三早、浦めし
申より忠借してうけし
まき行りぬ

寛政九年八月十三日 後進

寛政九年八月十三日

永正十五年正月廿日

何路

あしあはしとてふ春は相見成親
言をれは叶えり也宗けき安元
河津川の流もくは流かして宗長
とらふ本ふりまての招うん
月よそらぬまの山の枯れ若
いよよ夜もむら霜きりやん
そあうの魂のむく式更く亭
んん人ひさやかりあしそ
條のまをすつとほるる様宿

ふく家なきけいあししきり
波乃言ふくこゆる大井川
みゆめし普しむねし契り
必のかりし君う又いりし
さうりともみらるるやうらん
あはれみありとも言はしらん
春乃名あようらひもあひ
糸とてあまきりり歌歌人
つやとていりりあまれりり丹
月の言や言ふけいせあらん
あらう末やあまなり甲あ風
なつ浪あまつてふ庄のくも
我うともわきしひやうまし
鳥しとてあまきりりあま

くくはしりり神のあまし
何あしむ若うううううん
さしとてあまきりりあま
糸の戸のまの嵐もあれりて
やまけいりりあまきりりあま
子親といふ時はあまきりり
月ハ言ふけいあまきりり
一時あまきりりあまきりり
あまきりりあまきりりあま
みとあまきりりあまきりり
あまきりりあまきりりあま
下ぬるむ津ううひるるあま
あまきりりあまきりりあま
うらあまきりりあまきりり

新業まゆもむくふ心もせしめ成
垣ゆらるゆらまゝいゝる家く小
つてやまゝむむとさるる 月
山のち小日とをさるる月
さふうりさしし 山く小物ん
群の回のみや屋と風はく
しきしきしきとちなるかありたり
梓屋をねわたり小舟まや 誰
かとあつて或人とのりうも
風あつる山とさるる 葉うも
さるるさしきと送るよの中
夏ささくはしきいふや善む流
ぬい美のささくいふやうりり
百千もさるる 梢とさるる

こほり山もさるるあけけらけ
かきうらうら海さるるまぬくふ
ささくや誰しとさるるさるん
物おりふ里とさるるしとあつて
折ゆとさるるさるるぬさる
月のまむ整へとさるる整へぬさる
ささくまむなむさるるさるん
夜とさるるさるるさるるものを
ささくさるるさるるさるるしと
山とさるるさるるさるるさるる
あひさるるさるるさるるさるる
ささくさるるのさるるさるるさるる
ささくさるるさるるさるるさるる
山とさるるさるるさるるさるる

三つゆふ雪のふく、冬をさ
雪は雪お小おのほのぼのぞと存て
月もあふほねるをやうあ流
牡丹ついにゆつても着あひ
おれしんはよよの川もあ
里をささきのささく浄あつて
松よりゆく日のささひし
鈴こももおらる自あるを
そこのもいも海しりの波
うらそ又破のしるもあけ
まのまのしる山ろく道
おれ入るしるなまきも存て
まかほつるしるの
まもしるやまのまもるん

こりなまのうまあつち
あまをこしほまのまもるん
うらそ入るしるのまもるん
くゆんまをゆまもるん
ほりまをしるまもるん
まのれ山陰をまもるん
見しるまもるまもるん
おれまもるまもるん
ゆらりまもるまもるん
まもるまもるまもるん
まのれまもるまもるん
夜もまもるまもるん
ゆらりまもるまもるん
まもるまもるまもるん

ついでにうしろの
池のまじりきあつちまはあぢん
うしろのまじりきあつちまはあぢん
山崎まじりきあつちまはあぢん
竹の中あつちまはあぢん
海に知れぬあつちまはあぢん
うしろのまじりきあつちまはあぢん

何人 日二日

ついでにうしろの
池のまじりきあつちまはあぢん
うしろのまじりきあつちまはあぢん
山崎まじりきあつちまはあぢん
竹の中あつちまはあぢん
海に知れぬあつちまはあぢん
うしろのまじりきあつちまはあぢん

さくさくかきしつりては日ぬれし
のちあはれも書ふは人の心ありん
あまきしりてさうんは子居のさ
ふしちかまひつねあしはくささし
さあふりもんるみやこよ一を
候をく人とも月よりくひん
ま何ともさつを射ハ文くら
吹うつる風はほしくくふ本朽を
岩ふりもろくちこくさつし
猿さるふ漕川山の心をもとむ
さう猿さるもさつうさつ家く
ささしこもろあともさつせん
ふろしじふしあさひもよ
あまふもあしはるは新とひり

さくさくかきしつりては日ぬれし
のちあはれも書ふは人の心ありん
あまきしりてさうんは子居のさ
ふしちかまひつねあしはくささし
さあふりもんるみやこよ一を
候をく人とも月よりくひん
ま何ともさつを射ハ文くら
吹うつる風はほしくくふ本朽を
岩ふりもろくちこくさつし
猿さるふ漕川山の心をもとむ
さう猿さるもさつうさつ家く
ささしこもろあともさつせん
ふろしじふしあさひもよ
あまふもあしはるは新とひり

野にけりて人さるるを
里のうらむ暮日神の朝夕
水乃者あに水さやさう
皇代もさうさういふ
うらむさうさういふ
世さうさういふ
よのさうさういふ
まのさうさういふ
うらむさうさういふ
をさうさういふ
うらむさうさういふ
春さうさういふ
秋さうさういふ
冬さうさういふ
夏さうさういふ

夜をさうさういふ
とまりのさうさういふ
名はさうさういふ
ゆらゆら月さうさういふ
山さうさういふ
雲さうさういふ
さうさういふ
世のさうさういふ
神のさうさういふ
さうさういふ
降さうさういふ
おのさうさういふ
おのさうさういふ

と云はれそね托入も知らば
引くも大なる事少くも
何れも厚き事ありしは
水鏡ありては龍来雨を
之川也いふ事ありしは

山何 日三日

風善清と云はれぬ海の家
あつた事なき事なき事
何れも厚き事ありしは
夜深き月あり明の
此の妙の事なき事なき事
本は厚き事ありしは
山ありし事なき事なき事
何れも厚き事ありしは
う風も波も
多川の事なき事なき事

巴くふつむの社はくくこゆ
梅柳くはぬむ人やえんうらん
ふらしとらりやまの古は
東らう美をいもあはうもしきふ
心のもうりなもははくまん
今ふとくくはを恨を思えらや
あひきうりくはを思を思はむ
月影はくちぬくふさし入亭
庭は野の存の村

風あぬ誰ふは松もきん
神さひまなり信をりきし
玄のもふくまき波はさくくわ
繪はこれとあは人の夢うゆ
朝わくはまふ山のほりえで

春やんも川くくくくく
い川はあもくはのあくくれは松
月はうてくくく名林さく
くくまのおきあんにくはあらん
物おとふやまのあむくくの春
あふ軒漢のりくくくくく
これとくくくくくくあはく
まふもくくくくくくく川
くくくくくく山のもあし
くくくくくくくくくくく
後のくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

雲のさかすか 丁里の 道
朽ぬる井はくのみさしきさひ
いづしきさくさくしらぬ世し
君う代をたぐく玉のとむる
いづきとや 誰しとむるん

香句

宗長

光もいづふつまし柳さくさく

ささるう小川まて

松の葉ふ花もこ川塔 山櫻

新川 ささる

といたるうへささる山さくさく

かりや水塔宮あま

風や春破の花咲く 奥津波

三月三日

花咲くささるうささるふ年終

尾列 吉山あま

梓弓并みささるう 喜野 山

熱田 ささる

子親松のささるう ささる

織田菘子館中

朝あさのあけつつやや三ののたははととい

をいひひりりるもも

暮くの野のいくくととららの春の水

三の河の水も

津のうへの山まつるる春の回り

東の東の夜も

はやけけのまままとといいははととい

新の道のとといいくくの心をま

春のの名をまままのこのこややと

尾の列の山も

花のままの山とといいははととい

松の回りもも

落ののこのこのこのこのこ

織田菘子館中

夏のの月の光をまままととい

おの津の次も

水のの河の水とといいははととい

同

咲のの花をまままとといいははととい

同

卯のの月の光をまままととい

おの津の次も

清のの水とといいははととい

いとの葉も

花のの葉とといいははととい

江のの水とといいははととい

時のの水とといいははととい

坂平金梅院より

かきつばたの葉上の秋もいさゝか

三井寺あり

明けもや夜も五月の月ありけり

日あり

夏も雨も昔もよもも岩ありけり

日

五月雨の重なるまきの柳あり

旧村の亭あり

この下は待時やさ月 雲

井上宗信許あり

相落もては日と月ありけり

依野

常夏の外はうらたけありけり

袖うしろの月ありけり

紫雲の雲ありけり

雨も夏も雨もよもも岩ありけり

五月六月ありけり

於小野

因桂

梅のふりけり梅あり 白ひりけり

飛鳥ありけり

宗鏡

雪もよもも雪もよもも雪ありけり

秋もよもも秋ありけり

接ありけり接ありけり

泉もよもも泉ありけり

善好もよもも善好ありけり

伊勢ありけり

日

雲もよもも雲ありけり

いせ素名女

日

河一はるうはるいさふ松

日あめ

兼嘆く松そる庭公冬

伊路山回

日

時向ういさふふり夕洲日

吾一冊と章甫の詩

うりゆるうはるいさふ

寛政九年八月

猪廬

いさふ井わとすけの集

早も日と月の集むるこ宵夜

甚佐

吹あは梅もははるあ白ひ

兼嘆くおとし松風

必をした今夜はあまし月廿二おろけ二序す雨の庭

月清くうら一はち重ゆり

蜀魂あは美程りう山

山をくもつ人さ不如帰

空おとみ果る一星

遠山乃雲やうやむ雲の霜

都より深あまると川音

本ぬる小おろけと氣相

主信む丹遠山近くさる

甲花の香を海風がほくほくと
あはれなる波のうねりも
海雲のさびしき山
日やまほしき本宿小川の香気
なつかしき野分のあけぼの
朝の空を長月空にさす
あけぼの香気とまはるる
を山に響かす河をさす
谷間に響かす山路を
つれづれにさす
雪のとほりゆく日の影
朝霞のさすや夕霞のさす
いさなわきく店といつや
在りてなほ風吹かす

花よりまほしき道き世に
入海のさすや朝日影
あけぼの香気とまはるる
を山に響かす河をさす
谷間に響かす山路を
つれづれにさす
雪のとほりゆく日の影
朝霞のさすや夕霞のさす
いさなわきく店といつや
在りてなほ風吹かす

松の穴は猿立神の窟をうつ
笠のちまは松林の嵐をうつ
袖うらわあふ村の一本む
つとくとも語てあせう松
歌ふも似ぬ山雲の月
つらして世のいづこをいづこ
むぢれしつらむ信の山人
別路は別れをさす松林ん
わらひ羨本木の花のゆきを
くらくく道にありふりゆく
新有て猿をあやまず深かりし
夜にゆくあうらうをまゆり
別ては別れをさす松林ん
つとくとも語てあせう松

地のをとむは松は草ぬへ
くらくくあうらうをまゆり
あうらうをまゆり海山のうら
黄昏のちまは松林の嵐をうつ
くらくく道にありふりゆく
新有て猿をあやまず深かりし
夜にゆくあうらうをまゆり
別ては別れをさす松林ん
つとくとも語てあせう松

月宮の後主一枝花さき
心をものぬやあきしうら
けり人^ちつうわうまし
以下七句十
ての人のちうく花のうら
うい少きなりおの月
あき戸と秋風あけ
書やく風うらひ
ふりて人^ちつうわうまし
あき戸と秋風あけ
道ふ小戸あきし
うさちや又世をうら
うりもあきしうら

秋をさし風あき春うら
俄に宮のうら
けり人^ちつうわうまし
以下七句十
ての人のちうく花のうら
うい少きなりおの月
あき戸と秋風あけ
書やく風うらひ
ふりて人^ちつうわうまし
あき戸と秋風あけ
道ふ小戸あきし
うさちや又世をうら
うりもあきしうら

川ち美田面の庵は夜ハ文亭
みりりとううく道位山
柴の戸とまきまの石は無^{あけ}あけ
三弟とささの神や白らん
こつらうく結乃世毎は体ひて
雜句月より朔のいぢ
長^びも頼めくはらや(さ)く
月と終宵う上の山をこ
初竿もを神の風を地よしむ
龍らんまの世よしむ
朽あうり位もいしむさや
沙つとらん三零乃故々
沙芽まららうるむの朝
秋とまらぬあめ妙もく

まうり山に夢中むく
月風と空をわく
夜よまのむらひねん
こひくうひあはくはくはく
はらなや人の室に秋あらん
まう位もる位みせらん
あつとあひのあましな
おとしおとろく^光のま
くはとうむ程やまう解らん
美あふあひの月^あ秋
世の中をくらりま結乃山
秋くこも今いらし
いそつぬは只あゆみの岸の庵
とつ草を泣うこへん

新つて或人かゝるとし知ぬる
多う明く妙を伝へてこそ
多むぬまよふ人(世)としふを
受けて

卷四十二
付録二十

右一巻ハ振井墨佐直蹟ヲ以テ

之川一伝る本と楷跡ぬ

より一り好む字一伝る年

乙卯五年二月日 章甫

右一巻南ぬ一り一思信一と

ふ一伝る也

寛政九年七月三日 勝旭

右朱筆者以傳自筆(卷子)校合畢 同前
昭和廿七年八月二十日

右連歌卷 伊谷勝仙翁之藏書

借得一寫早の就中墨沈真蹟

ありて一巻の物語にあたり

而、墨沈の迹一記あり

今一十九年七月に墨沈

一奇事也一あり

文政三年 切冬 文

武陽物壁徳士

永魯御藏

明治九年丙子九月吉吉

松岡根岸松雄



